

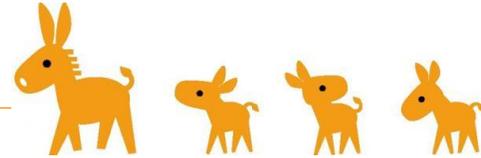
「ふらっとカフェ」とは

- ・ 認知症の人や家族、地域住民、医療や介護の専門職など、誰もが参加し、集える場を「認知症カフェ」といい、和泉市では「オレンジカフェ」として呼んでいます。さらに誰でもふらっと立ち寄れるようにとの思いから「ふらっとカフェ」が開設されています。
- ・ 新型コロナの影響で、開催中止となったオレンジカフェのつながりが途切れないように、どんな人もふらっと立ち寄れる場所として、令和3年度から事業を開始しました。
- ・ 和泉市が場所を提供し、運営は認知症機能強化型地域包括支援センターが行っています。
- ・ 茶菓は提供されませんが、どんな人もお互いの弱みや悩み、よかったこと、うまくいった支援などそれぞれの立場から、自分のペースで語り合う空間です。
- ・ 月1回程度の開催、多くの市民に参加いただくため、開催場所は月によって変更します。
- ・ 和泉市の認知症カフェの種類



	施設カフェ (オレンジカフェ)	ふらっとカフェ	まちカフェ
事業開始	平成27年	令和3年	令和6年開始予定
主旨	「認知症になっても大丈夫、認知症とともに暮らせるまちづくり」を発信する拠点としての役割を担う。	新型コロナウイルス感染症の影響で実施が困難になった施設カフェのつながりが途切れないように、どんな人もふらっと立ち寄れる場所として開設。	より身近な地域でいろいろな人が出会い、同じ状況の仲間が集える居場所としての役割を担う。
特色	認知症の人と家族、地域住民、専門職等の誰もが参加でき、集う場として開始。	施設カフェと同様。	ふらっとカフェよりも市民に身近で自然に集える場として開始予定。
実施主体	認知症高齢者等の支援を行う医療法人または社会福祉法人であること	・ 和泉市 ・ 認知症機能強化型地域包括支援センター	認知症について理解があり、支援を行う団体
配置	医療介護福祉の専門職が1名以上いる。	認知症機能強化型地域包括支援センターの職員を専門職としてまかなう。	認知症パートナー（養成講座を受講した認知症のボランティア）が1名以上参加。
開催場所	高齢者施設等	コミュニティーセンターや総合福祉会館などの公共施設	自治会館、老人集会所、企業、飲食店、スーパーなど

「ふらっとカフェ」の様子について



- 夫婦のどちらかが認知症で、ご夫婦いっしょに参加される方も多い状況です。
- 家族の「相談する場所」ではなく、「気持ちや思いを吐きだせる場所」になるように、「参加者みんなと悩みを共有したい」「良かった対応を聞きたい」など、要望に合わせて話しやすくなるような配慮をしています。
- 認知症の人からは「楽しい場所だ。」、家族からは「いろんな話を聞いてもらうことで気が楽になった。」との声が上がっています。
- 「もっとこのような場所を提供してほしい。悩みを共有したい。」との意見も多くありました。また、「このような場所があることを今悩んでいる人に伝えたい」という声もありました。



和泉市の認知症に関するその他の取組の紹介



◆ チームオレンジ※の取組

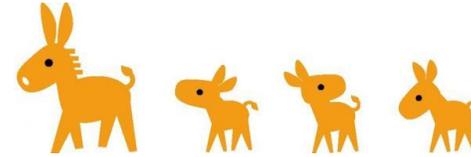
※認知症サポーターが、ステップアップ講座を受講し“活動する認知症サポーター”となり、チームを組み、認知症の人や家族に対する生活面の早期からの支援等を行う取り組み。認知症の人もメンバーとして参加します。認知症サポーターが新たに力をふるう場として期待されています。

- ・現時点で30チーム。認知症パートナー（活動する認知症サポーター）は、140名程度（令和6年6月21日視察時点）
- ・認知症と診断を受けた方だけではなく、認知症かもしれないと不安に感じている方や悩みを抱える方全員を地域で守れるような体制を作りたい。
- ・認知症サポーター養成講座を受講後、活動したい認知症サポーター向けに、「ステップアップ講座」を開催している。ステップアップ講座受講後には、これからどのように活動していくかサポートすることを目的に、交流会も開催している。

◆ 今後の取組

- ・キッズサポーターの養成に力を入れているが、さらに親世代へ認知症サポーターになってもらえるようにアプローチしたい。
- ・企業に向けて、チームオレンジを立ち上げたい。
- ・ステップアップ講座の内容改善（web化等）。
- ・ふらっとカフェをもっと市民に広めていきたい。
- ・家族が認知症であることを知られたくない人や、認知症で悩みを抱える人にどのようにアプローチできるか検討がしていきたい。
- ・ふらっとカフェよりさらに市民が身近に集える場として、認知症の方の支援を行う団体が主体の「まちカフェ」を令和6年度より開始予定。

視察を終えて・・・



- ・ 認知症について、悩みを打ち明けられる場所の提供は素晴らしい取組であると感じました。ふらっとカフェを視察したことで、認知症本人及びその家族にとって、話を聞いてもらえる場があることは非常に大切だと実感しました。
- ・ カフェでは話す内容は決まっておらず、参加者の話に合わせた柔軟な対応がされていたため、参加者が気兼ねなく何でも話せる居心地がいい空間作りがされていると感じました。
- ・ 聞き手の職員は、認知症の人とその家族どちらかの味方になるような発言はせず、どちらにも配慮した発言をしていたことが印象的でした。

【例】 認知症の人が補聴器をつけないことについて、家族がイライラしているという話がありました。職員は、ご本人には、「忘れてしまうこともあるよね」と共感し、家族にはイライラする気持ちに共感したり、専門職のひと言「本人は、補聴器を必要としていないのでは？」で、家族が救われたという話を思い出してもらうなど、どう向き合うかについてアドバイスしていました。

